

## 公開講演会記録

## ボリビア開拓記外伝

(一社) 日本ボリビア協会相談役 渡邊英樹



戦後の混乱と食糧難の時代に幼少期を過ごした私は、海外移住にあこがれを抱き続けて、1965年に設立2年目の海外移住事業団に就職しました。

そして、ボリビア国の日本人移住地への支援に関わることになりました。

その時の体験を沖繩の『琉球新報』に3年60回にわたり連載しました。

それに加筆したものが、沖繩本土復帰50周年の2022年、琉球新報社より『ボリビア開拓記外伝』として出版されました。

今さら「なんで移住だ」と思われる方もいると思いますが、移住は紛争・

戦争と深い関係があり、ロシアのウクライナ侵攻による何百万人という海外への避難移住にも見られるように極めて今日的な問題であります。

日本もかつて、戦後の食糧難・就職難に有効な政策を見出せない時期があり、政府が海外移民を奨励した時代がありました。

現在は、逆に海外からの移民を受け入れる国となっていますが、異文化の人々といかに共生を図っていくかという命題を突きつけられています。

日本移民の苦勞の歴史を辿り、それを反面教師として、より良い異文化共

生社会の構築を考えるきっかけとなることを願っています。

本稿のタイトルを本と同じ「ボリビア開拓記外伝」としましたが、沖繩県民のボリビア移住は、当初から苦難続きで、そこから脱却しようとしてとった起死回生策も常軌を逸する事態の連続で、当時は公言をはばかれることばかりだったので、「外伝」としました。

しかし、これはほんとうにあったことであり、リアルな正史です。

本題に入る前に日本人の海外移住の歴史について簡単に触れておきます。明治以降の日本人の海外移住は当初

はハワイとカリフォルニア州が主流でした。ところが、黄禍論と日本人の勤勉さがアダとなって、他の移民たちの妬みをかけて、排日運動が激しくなります。1907年「日米紳士協約」によって日本はアメリカへの移民を自粛せざるを得なくなりました。その代わりとなったのがペルー、そしてブラジルでした。しかし、ペルーでのサトウキビ畑での労働は劣悪で各地で集団脱走が起きています。

そうした人々が活路を求めたのがボリビアのリベラルタ周辺のアマゾン河上流域でした。

アンデス越えの様子については、私が親しくしていた新垣庸英さんの日記がつとに有名です。1916年、庸英さんたち一行38人はアンデス越えの途上で見つけた同胞の墓の前で、志半ばで亡くなられた人の無念さに想いをはせつつ悼みました。

「汝の骨は、此の雪中に朽つるとも汝の進取の気象に富める霊は永久に止まり、後進の同胞を激励し、汝のあこがれ居たる森林地方の宝庫も我が同胞

によって開発せられること、難事にあらざればなり」と庸英さんは、その日の日記に綴っています。

1908年にガソリン自動車が発明されタイヤの需要が急激に拡大されます。

当時、タイヤの原料となるゴムの樹はブラジルとボリビアのアマゾン河上流域にしか植生していなかったからです。天然ゴムの樹液を採集して固めたボラチャの対価として元締め会社に支払われたのが英国の1ポンド金貨であったからです。

金鉱山に入らなくても金を手にすることができたためゴールドラッシュとも言われました。ゴムの苗木が東南アジアに持ち出されて大規模なプランテーションができるまでの最盛期には約2千人の日本人がいたと推定され、当時は南米最大級の日系人社会を築いていました。

ゴム樹液採集で得た資金を元手に農業、行商、仕立屋、瓦職人等々特技を生かして安定した生活をし、社会にも貢献して尊敬を得るまでになっていま

した。

それが第二次世界大戦の敗北によって事態は一変します。

そのときの様子を日系ボリビア人の国民的作家で詩人のペドロ・シモセ氏が「歴史を持たない人々の物語」という一文で綴っています。その一節をご紹介します。

「リベラルタの日本人社会は完全にボリビア社会に同化しており、その経済力だけでなく、ボリビア社会とりわけリベラルタの地域社会への貢献が認められて尊敬されていた。しかし突然、第二次世界大戦という嵐のような逆風が日本人の夢を吹き飛ばした」「日本は戦争に負けた。戦いに敗れると、連合国側の勝利を盾にし、またアメリカ合衆国のやり方をまねて、地域のボスたちがドイツ人と日本人を追い詰め、財産を接収した」「彼らは作物をなぎ倒し、収穫物を燃やし、豚、馬、牛を殺した。すでにボリビアに帰化していた元日本人の農業者と商人は貧困のどん底に突き落とされた。1945年以降、ドイツ人や日本人の子ど

もであることは不名誉なことであり、屈辱と侮辱と恥辱に耐えねばならなかった」と記されています。その結果、この人たちは日本人であることを隠し、自分の子どもたちにさえ自らのルーツや日本のことを一切語らなくなってしまいました。

日本語が分からず自分のルーツも分からずアイデンティティを失った深い孤独を生きる日系人の悲しい誕生です。

ところが、自らがこんな苦境の中にありながらボリビアの沖縄県人たちは焦土と化した本国沖縄の人々を救おうと立ち上がります。「沖縄戦災救援会」（具志寛会長）を立ち上げ、寄付を募り本国沖縄に救援物資を送り、さらに積極的救援活動として、本国の人々に夢を与えようと、ボリビアに「沖縄村」を建設すべく動き出したのです。

この「沖縄村建設構想」はボリビアの未開の東部平原を開発したいというボリビア政府の思惑と戦後の混乱に有効な政策を見出せない琉球政府さらには占領政策を円滑に行いたいという米

国政府の思惑とが合致して、事は一気に運ばれていきます。「うるま移住組合」を設立し、1万5千ヘクタールの土地の払い下げを受けます。

米国スタンフォード大学教授ジェームズ・ティグナー博士の「移住地として適地である」という報告が決め手となり開拓移民の募集が開始されます。すると4千人にもおよぶ移民応募者が殺到したのです。その中から最初の先発隊として第1次・第2次移民の400人が選ばれました。

那覇港を出港して南アフリカの喜望峰を回って45日の船旅の後ブラジルのサントス港で下船。それから約3千キロの鉄道の旅です。木炭蒸気機関車ですから、薪を自らが調達し、線路脇で自炊をしながら、約1週間をかけてサンタクルス市から50キロほど離れた「うるま耕地」に入植しました。

入植したはいいものの、1954年は大干ばつの年でした。入植後3か月ほど降雨がなく、飲料水に利用していた沼も枯渇し、掘った井戸は塩水のため使えず、リオ・グランデの濁った水

を飲む事態となりました。

野菜も育たないため栄養バランスは一気に悪化し栄養失調状態になり、そして10月30日、ついに最初の犠牲者が出ます。その後入植者の半分近くが罹病し犠牲者は15人に達してしまいました。

原因が分からないことに不安を抱いた医師の勧めによってパロメティヤに転住しましたが、これも地権者との交渉が不調に終わってしまいます。心配したアメリカ政府の肝いりもあり、パス・エステンソロ大統領の協力によって現在のコロンニアオキナワに再転住します。それはボリビアに到着してから2年後のことでした。

この転住によって、新旧の移住者は袂を分かっことになってしまいました。

旧移住者には、良かれと思っていたことが新移住者を死の地に導いてしまった自責の念が生じ、新移住者には移住地設定への不信任が生じてしまったことはやむを得ないことでした。戦争の犠牲者同士、それも同郷の同胞同

士のこんな悲しい結末を誰が想像できたでしょうか。

ところがこのコロナオキナワも早ばつと水害に見舞われます。相異なる天災が同時発生することについては、説明を要します。

長崎県出身者が多いコロナサンファンとコロナオキナワとは100キロしか離れていませんがこれが降雨量において致命的な差を生じさせます。サンファンの年間降雨量は1800ミリですがオキナワは500〜1000です。オキナワの最大無降水日数は140日です。ブラジル側から湿原を渡り湿気を含んだ雨雲がコロナオキナワには雨を降らさずに通り過ぎてしまうのです。その雨雲がアンデス山脈の冷気に触れて大量の雨を裾野に降らせます。サンファン移住地の降雨量が多いのはこのためです。すると水かさを増した水がリオ・グランデを下り、コロナに洪水をもたらします。これが第1コロナに洪水をもたらし第2・第3コロナに干ばつを同時に引き起こす原因です。

1968年第1コロナは、リオ・グランデの氾濫で浸水被害、第2と第3のコロナは大旱ばつに見舞われます。

そんな被害の癒えぬ1969年7月18日に私は海外移住事業団サンタクルス支部に着任しました。

翌日19日（日本時間の20日）の新聞でアポロ11号の月面到着が大々的に報じられていましたので、ほぼ同じ時間帯に同じ空の上をいたんだ！という高揚感をもって紙面を眺めました。

私はサンタクルス支部の融資の責任者になりました。当時の移住者の経済状態では、現地金融機関からの借り入れは不可能に近く、貧しい移住者の経済的自立を図るためには日本国の政府機関からの融資が必要不可欠であったからです。

ところで、融資の責任者になるということは、自らが現金を輸送して借り入れをする移住者の一人一人に、直接、現金を手渡すことを意味します。コロナには銀行など存在しないからです。現金取引のみが信頼できる唯一

のものでした。

当然、現金輸送時に襲撃を受ける可能性などを想定しなければならぬ極めて危険を伴う仕事でした。

支部と事業所との間の連絡は無線通信でやりとりをしていましたが、私の現金持参の出張が筒抜けにならないように乱数表を用意していました。

数字を読み上げて事業所に出発時間知らせ、予定通りに到着しなかった場合は事業所から偵察隊を出す手はずになっていましたが、そんなものはまったくの気休めでありません。

コロナでは牛の購入などの取引は全て事業団の融資が前提になっていましたから、取引が迫れば、現金が運ばれてくる貸付の実行日時が簡単に、現地社会にも知れわたってしまうからです。

当然のことながらピストルを常に携帯していました。組合事務所の机に札束を積み上げて一人一人招き入れて契約書を取り交わして現金を渡していましたが、私は直ぐに手の届くところに拳銃を置き、ドアの影には同僚にピス

トルを持って隠れていてもらいました。

しかし、融資予算も少なく小規模にならざるを得ず、コロナアオキナワでは度重なる水害と早ばつもあって、移住地の将来に見切りをつけてブラジル・アルゼンチンへの転住そして日本への帰国者が引きも切らない状態となっていました。

一方、政情も大変なことになっていました。東西冷戦の陰が世界中を覆っていたからです。

南米大陸の「植民地的支配からの脱却と民主化」という大きな潮流に沿いつつも、なんとか共産主義化を食い止めようとしたケネディ米国大統領の下で進められた「進歩のための同盟」構想は、米国の多額の経済援助にもかかわらず思うような成果を上げられずに修正を迫られていました。援助資金の利権を狙っての政争が激化し、それによる政権交代が繰り返されたからです。

キューバ革命の成功、ベトナム戦争での有利な展開に力を得た共産主義陣

営の攻勢は勢いを増して、それは1966年11月にチェ・ゲバラがウルグアイのビジネスマンに扮装してボリビアに入国してジャングルに潜伏したこと

で頂点に達します。

南米大陸に共産主義革命の火がつくのを阻止するために、米国は、文民であろうと軍人であろうと反共産主義者であれば支持する方向へと政策転換を図らざるを得なくなります。その結果、この時期の南米大陸は米ソ冷戦の代理戦争的な紛争が、至るところで起きました。その中でもボリビアは特別に政変の頻度が多かったのです。

左翼政権になると大土地所有反対という運動が必ず起こるからです。「ラティフンディオ（大土地所有）反対」を掲げた集団が、日本人移住地にも不法侵入してきました。コロナアオキナワでも数軒の農家はその被害にあっています。

ベトナム戦争が資本主義陣営と社会主義陣営の対立のマグマが噴出する大噴火口とすれば、ボリビアは常に小爆発を繰り返す小噴火口と言えました。

侵入者は「ここは我々の土地だ」「日本人は出て行け」と叫び、マチェテ（小枝払いなどの農作業で使う幅広い山刀）を空に向かって突き上げます。

ソ連の後ろ盾で左翼政権が樹立されると共産党の工作員（オルグ）4〜500人がソ連大使館に入ったとラパス市の日本人から情報が入りました。

おそらく、番犬が吠えたのでしよう。これに学生運動が絡んで「日本人が、我々を犬で追い払った」とラジョで反日感情をあおる放送をしきりに流します。

その状況を米国と気脈を通じた軍人がクーデターによって左翼政権をひっくり返すという攻めぎ合いが繰り返さ

さらに「日本人移住地の病院は我々

を見殺しにする」などと喧伝し始めました。腹に据えかねてレネモレノ大学の学生運動のアジトに乗り込む決心をしました。日本とボリビアとの移住協定によって日本人医師がボリビア人を診療できないと定められていることを説明し、毒蛇にかまれたとか、交通事故にあったとか、人命に関わる場合は、ちゃんと対応していることを説明しました。

その結果、幸いにして翌日から煽動的な放送はピタリと止まりました。

しかし、不安定な政治情勢は、コロナの将来を暗いものにしていたので、サンタクルス市日本人会も、各移住地と合同で独立記念日には「日本人移住者はサンタクルスの市民と共に」の横断幕を掲げ行進し、友好の促進に懸命に努めました。

我々が政治と無縁でいられないという一例です。

さて、これまで見てきましたように政情不安と天災による農産物の壊滅的被害は移住者を容赦なく打ちのめしました。

若い娘たちはサンパウロの縫製工場に働いて親元に日銭を送り、親たちは近隣の綿作農場に出向いて綿花の摘み取りで日銭稼ぎの労働をするようになりました。「何をしてもダメだ」という気分が蔓延して、移住地から出て、ブラジルや日本へ転住する人が後を絶たなくなりました。

一方で、日銭稼ぎのために綿花収穫に行った移住者から、綿は早ばつに強く、生育もよく、繰綿工場も大分儲かっているらしいという朗報が伝わってきました。

宮川清忠農業試験場長の指導の下、コロナアでの綿花の試作が順調であったことから、移住地も事業団もコロナオキナワの起死回生として綿花事業に取り組むことになりました。

この時、精力的に試作に取り組んでくれた宮川農場長は、ペルーでJICAの野菜生産技術センターのプロジェクトリーダーだった時、アルベルト・フジモリ政権に反対するテロリストによって二人の同僚とともに銃殺され殉職されてしまいました。

移住地も事業団もコロナオキナワを救うには農業の大規模機械化を図ることが可能な綿花事業しかないという借金でこれに挑む大博打を決定します。

時の大蔵省（現財務省）が前例のない大型融資を許可してくれたのは、2年後に控えた本土復帰に際して、海外の沖縄県民を困窮のまま放置できないという意識が働いたと考えています。しかし、大蔵省はその融資の実効をあげるために「しかるべき人間を沖縄移住地に出向させること」という付帯条件をつけてきました。

そして私に白羽の矢が立ちました。コロナオキナワ農牧総合協同組合CAICOの設立を指導して、私はCAICOの経営顧問として組合運営の中枢にいて、現在のお金にすると70億円という大事業に関わることになりました。

ところが、いざ融資の実行を受けるという段階になったにもかかわらず、CAICOに出資金が集まらず、融資を受けるための自己資金も集まりませ

んでした。苦肉の策として、無利子、無担保、無期限の見せかけの出資金を作り出しました。それからの2年間はハラハラドキドキのままに西部劇のような世界を生きることになりました。その部分は省略させていただきますが、ご関心のある方は本を読んでみてください。

綿花事業は最初の2年間は、大成功でしたが、その後の気象変動で降雨量が多くなり収穫が激減し、またオイルショック後の世界不況により綿花価格が暴落して膨大な借金を残して終わることになります。そして私はコロナオキナワに膨大な借金を作った張本人として糾弾されることになってしまいました。

ところが、降雨量が増えたことにより適作物となった大豆と小麦等の栽培にいち早く早く適応できたことにより、汚名が消えてボリビア沖繩県人会の名誉会員にも列せられることになりました。

綿作導入時の思い切った投資による機械化大規模農業で、実際に営農し、

組合組織の在り方を学び運営をした体験が今日の繁栄をもたらしたというのです。

農林水産省の2014年度「沖繩県農業の概要」によると沖繩県の総農家戸数は約2万戸となっていますから沖繩県の1戸当たりの耕作面積は1・8畝です。

これに比べてコロナオキナワは、その約160倍から320倍と考えるとよいのです。

沖繩では、圧倒的1位の栽培作物であるサトウキビとの面積比較をすると、

- ・ 沖繩全県下のサトウキビ作付面積 1万2700畝
- ・ コロナオキナワ大豆作付面積 2万8804畝
- ・ コロナオキナワ小麦作付面積 1万5015畝

となり、この大豆と小麦だけの栽培面積で、沖繩のサトウキビ畑の3.5倍になります。その他に陸稲・トウモロコシ・サトウキビ・ひまわり等の作付面積で沖繩県のサトウキビの作付面積に

匹敵するくらいあると推定されます。牧畜はコロナオキナワの外に牧場を所有している農家が何軒もあり、正確な数字はつかみませんが牛の頭数も優に2万頭を超えていると言われています。

2018年度のCAICOの1組合員に対する貸付限度額が30万ドル、CAICOの総貸付予算額は1千万ドルです。

綿作を開始する頃の海外移住事業団の農協への融資と300戸余への個人融資を合わせたサンファンとオキナワ両移住地への貸付総額が10万ドルでしたから比較するのがおこがましいほどの差であり、奇跡的な農業経営規模の拡大とコロナの発展です。2〜3万ドルの借金に各農家が苦しんでいます。とが遠い過去のことになっています。

あきらめずに残った10%の人々の壮絶なる努力の結果、コロナオキナワはめざましい変貌を遂げました。それによって、コロナオキナワは、これまでの「沖繩県のお荷物」的な存在から「沖繩県の宝」へと変わりました。

SF小説の『日本沈没』ではないが、もし将来、戦争や大地震、大隕石の落下等により沖縄本島の危機が予測されたりしたときには、沖縄県は、チャーター便で子どもたちをコロナオキナワに緊急疎開させることも視野に入れられるのです。ポリビアには、沖縄本島の面積の半分に匹敵する県民のコミュニティがあります。

宿泊先の選定や食糧の確保はもとより教育の継続にもまったく困らないのです。

空想的過ぎると言ってしまうかもしれませんが、そんなことが想像できる県は、沖縄県においては、他にどこにもありません。

その一方で、コロナを去っていった人は、なんと入植者の90%にもおよびます。

私は、日本に帰ってきた人たちとも今に至るも交流を保っています。皆さん苦労はされたが、しっかりと生きています。そこには、ポリビアでの農業開拓はあきらめたが、人生をあきらめたわけではない人たちのたくましさ

あります。

おつきあいを通じて、私の方が勇気づけられることの方が圧倒的に多いのです。

以上ポリビアにおける沖縄県民の開拓の歴史を辿ってきましたが、貧困の故に、そしてまた戦争によって家族を失い、さらに自分の土地を接収されて、もがき苦しんだ人々が「人間として生きる権利」を求め、夢を託して海を渡った歴史的現実はしっかりと受け止めておかなければなりません。

そして、同じような境遇の故に、今まさに、海外から日本にやってくる人々が増えています。

我々は、その人々に「人間として生きる権利」を享受できるように配慮していきたいものです。他国で見られるような移民の暴動などという事態は絶対に起こしてはならないと思います。

「国内における国際協力」の視点で多文化・多言語の共生社会の構築を目指すためには、日本のムラ社会の固有のあり方を含めて、日本人自身が改めていかなければならないこともたくさ

んあると思っています。

この分野での官民挙げての幅広い相互交流の活発化を期待しております。  
(2023年7月6日・公開講演会)

### 筆者略歴（わたなべ・ひでき）

1941年長野県佐久市に生まれる。長野県立野沢北高校・中央大学法学部卒業。旧海外移住事業団ポリビア国サンタクルス支部勤務、国際協力機構（JICA）、日ボ合弁企業社長等を経て、ビル管理会社を設立して独立。現在、代々木西脇ビルグループ会長、一般社団法人日本ポリビア協会相談役。

2019年から2022年まで『琉球新報』に「ポリビア開拓秘史―コロナオキナワと共に」を60回にわたり連載。

2022年5月『ポリビア開拓記外伝―コロナオキナワ 疫病・災害・差別を生き抜いた人々』（琉球新報社）を出版。